



MORIOKA
ROTARY CLUB WEEKLY

第5回例会(8月3日)
平成24年8月10日発行

クラブ事務所 岩手県盛岡市菜園1丁目10
川徳デパート内
例会場 同上 TEL(651)1111(代)
FAX(653)5622
例会日 毎週金曜日12時30分～

会長 藤村 文昭
幹事 佐藤 重昭
会報 福田 荘介
クラブ直通電話 TEL(653)5682

奉仕を通じて平和を Peace Through Service..... R1会長 田中作次



ゲスト卓話

「新渡戸稲造はなぜ『武士道』を書いたのか」

新渡戸基金事務局 局長
藤井 茂 氏

◆スピーカー紹介◆

藤井茂さんは昭和24年、秋田県大館市のお生まれで、盛岡タイムズで学芸部員・編集部員などを務めたのち、新渡戸基金に移り、現在は事務局長です。岩手の先人の研究者としても有名です。今年は新渡戸稲造の生誕150年で、企画展や講演会のほとんどに関わっています。

(阿部 広会員)

「武士道」は、三部作の中のひとつです。きょうは、なぜ書いたのか、その理由を話したいと思います。

日本人に生まれ、武士階級に育ち、武士の生き方を継けられた新渡戸

当たり前ですが、日本人として生まれたことがいちばん重要なことでしょう。それから、新渡戸は江戸時代末期で明治に入る6年前、武士階級に生まれたことがあります。士農工商で別な階級であれば、書くことはなかったでしょう。盛岡藩の武士の特徴として、たぶん言えるのは陽明学派の講義がなされていたことがあると思います。ただ知っているのではなく、知っていることを行動に現さないと、知っていることにならないという考え方が、盛岡藩の儒学の中にあっただのではないかと私は思っています。

それから、新渡戸が5歳のときに、袴着や着剣の儀という儀式を行うのですが、盛岡市先人記念館にレプリカの基盤があります。新渡戸は基盤の上に立ち、袴をはいて剣をつけた。そういう儀式を武士階級は行っていた。そのときの

気持ちを「幼き日の思い出」という本に書いています。新渡戸は非常に厳粛な気持ちになりました。真剣を身につけたことで「むしろ人を切ってはならない。悪いことをしてはいけない」という気持ちになったと言っていますから、新渡戸の道徳心に訴える儀式になったようです。

また、「武士道」を書いた理由の中には「母親にいつも励まされた」ということもあると思います。父親は5歳のとき、亡くなりました。その後、新渡戸は母親に「お父さんやおじいさん、曾おじいさんに似た、立派な人間にならなければいけない」と、絶えず言われて育った。そのことが新渡戸を支えてきたと言えると思います。それから、新渡戸が札幌農学校や東京の英語学校に行っているとき、母親が励ましの手紙を出す。その内容は「世界に名を挙げよ」ということだけです。明治・大正の人は、そうなんです。プレッシャーになったようですが、新渡戸は「母親のためにコツコツと勉強しよう」という気になったようです。先人記念館には、新渡戸の「世界に名を挙げよ」という本があります。読んでみてください。

それから、新渡戸は父親がいないため、手に負えない子どもになる。いろいろな悪さをするわんぱくな子どもだったので、何か事件があると「新渡戸の息子の仕業だ」と言われるほど、鷹匠小路では有名だったそうです。その新渡戸が最終的に立派な人物になったのは、その後の修養が人物を創ったのだと思います。

新渡戸が手に負えなくなった母親は、上京させることにしました。親父さんの弟である太田時敏が東京・銀座で武士の商法を始めたので、時敏は「おれが稲造を育てる」と、東京に呼びました。この人物に、新渡戸は非常に影響を受けました。時敏は、幕末の盛岡藩が賊軍になったときの総大将・楢山佐渡と大変親しい間柄でした。楢山が一人で負けた責任を負って明治2年6月に亡くなるのですが、その楢山の首を切るように言われたのが、時敏でした。時敏が佐渡の首を切れる訳がない。それを命じた官軍は首を切られる男といちばん親しい男を指名した。これは残酷で、時敏にはできないので、上京して静かに過ごしてした。新渡戸は明治4年夏に上京する。時敏は「明治になって開けていく東京で稲造を勉強させるのもいいだろう」と、新渡戸を養子に入れて東京に呼んだ。時敏は、盛岡藩を代表するような楢山と親しかったので、非常に古武士的でした。この叔父さんが新渡戸に対して非常に良く躰をしました。盛岡藩が負けたこと、武士の時代の掟など、幼かった新渡戸に吹き込んだ。それに新渡戸は洗脳されていた。そうしたことが新渡戸の心の下地にありました。

英語漬けの教育とアメリカ・ドイツ留学倫理観の根源を表明する必然性

「武士道」は最初、英文で書かれました。アメリカで明治33年(1900)1月に出版された本です。新渡戸は上京後、英語を習います。今は英語を「横文字」と呼びますが、当時は横に這った文字ということで「蟹文字」と読んでいた。新渡戸は、盛岡でいちばん最初に蟹文字を習った男の子だったのでしょう。

新渡戸家は、洋風な物が暮らしに入ってくる盛岡で一番最初の家でした。親父さんが生きている頃、江戸と盛岡を何度も往復していて、オルゴールや鉛筆、フォークなど、珍しい物を買っては、息子に与えていた。「こんなものが江戸(東京)では使われている」と、新渡戸は子どもながらに感じ取っていました。それでアルファベット程度の横文字を盛岡で習い、東京では築地外人英学校・共慣義塾・東京英語学校の教官に習い、最後は札幌農学校で英語漬けの日々を過ごします。すべての学科を英語で学ぶ学校ばかりでした。札幌農学校などは数学も植物学など、文科系も理科系も、すべて英語でした。これは、創立者のクラークさんが連れてきたアメリカ人たちは日本語を学ばないで札幌農学校の教授になったからです。生徒は大変苦勞したと思います。講義内容を書き取っても発音がわからないので、その部分は穴が空いてしまう。ただ、十何人で書き取るので、誰かの穴は誰かが埋めることができた。そうやってノートを突き合わせたのですが、どうしてもわからない単語がある。そういうとき、誰かが代表してノートを先生に持っていくと、先生が赤を入れてくれる。模範解答がわかると、またみんなで

清書する。それが復習になるのですが、そうしたノートが現在の北海道大学の資料室に残っています。皆さんも見てください。非常にきれいです。そういう英語漬けになって学んでいますから、今の我々の苦勞の比ではなかった。そういうことをしていますから、札幌農学校時代には相当の英文が書けたのです。そうした背景があったので札幌農学校からアメリカに渡っても、新渡戸は英語で不自由することはなかった。それほど当時の学生の程度は非常に高かったです。当時の学生の英語を学ぶという心構えは、英語を勉強してその背後にある世界の数学や農学・経済学を勉強するということでした。そういう意気込みで英文を勉強していましたから、札幌農学校は、アメリカの学校だった。東京では日本語で教えていたことを、札幌ではアメリカ人が英語で教えていましたから、札幌農学校はちょっと特殊な環境だったと言えると思います。

新渡戸が東京大学に入り直した当時は、札幌農学校のほうがレベルが上だったと思いますから、それに呆れてアメリカに留学する。そしてアメリカからドイツに留学したことは、日本という国のいろいろなことを振り返ってみるのにとっても良い機会になりました。アメリカに行って「日本人なら、そうではないのに」といったことをアメリカで学んだ。奥さんもアメリカ人だったので、奥さんからもそうしたことを聞かれた。それに対して「いつかは答えなければならない」と思ったのでしょう。決定的だったのは、ドイツ留学中にド・ラブレ博士に2日間、お世話になったとき、「日本では宗教教育は行っていますか？」と聞かれて、「日本では行っていません」と答えたところ、「宗教教育を行わ

ないで、あなたの国では倫理観や道徳観をどういうところから身につけているのか？」と言われて、新渡戸は「どういうところから自分は倫理観を身につけたのだろうか？」と、十年間も考えた。そこで自分の家の環境や母親や伯父から言われたことに行き着いた。そういうことから、日本人の心を一言でいうと、盛岡藩の考え方「武士道」から来ていた。新渡戸が記した「武士道」という本は、日本人の精神を外国人に分かりやすく書いた。事実としては、いくつか間違っていたところもある本ですが、日本人の考え方についての部分は概ね、間違いはない。それを新渡戸は出版しました。

最終的に、新渡戸はそういうものを書ける環境にあった。札幌農学校の教授だった頃、働き過ぎで病気になり、休養を余儀なくされた時期でした。休めと言われても休まないのが新渡戸なのですが、そのときにふと浮かんだのが、10年前にド・ラブレ博士に言われたことだった。それで休暇を利用した7、8カ月で書いた本「武士道」を出版しました。小さな本で掌に入るほどです。先人記念館にありますから、見てください。きょうは「武士道」という本が書かれた理由をご説明しました。

ありがとうございました。